
RED SUITS

寝猿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

RED SUITS

【Nコード】

N2480F

【作者名】

寝猿

【あらすじ】

化石燃料が枯渇した2XXX年、人類は新たなエネルギーを手にした。それは人体から形成される魔道エネルギー、通称”マナ”と呼ばれるエネルギーだった。舞台はトーキョーシティ、上・中流階級の住む「ネオ・トーキョー」を頭上に、牢獄とも呼べる環境下で3千万の人間が密かに生の営みを続けている「アンダーグラウンド・トーキョー」から幕を開ける。

MISSION 0：プロローグ

「や、やめてくれえ！！俺は、俺は関係ないんだ！！」

袋小路に追い込まれた男は尻餅をつき、息を切らしながら叫んだ。前髪は禿げ上がり、服装もいかにもボロで、とてもじゃないが命を追われるような男には見えない。しかしいくら落ちぶれたとはいえ、3年前のあの事件に関わった男だ。当時この男がリークした情報によつて多くの仲間が命を落とした。事件の黒幕であるはずは無くとも、関係ないと言うのは筋違いだ。

たとえ、俺たちのしたことが間違っていたとしても

右手に銃を構えながらカムイは思った。許すことは出来ない。心を埋め尽くしたこの憎悪を放つように2発、引き金を引いた。2つの光弾が男を襲う。一発は右肩を、もう一発は下半身を完全に貫いた。

「……つつつぎゃあああああ！！」「この世のものとは思えない悲鳴が、アングラウンド・トーキョーのスラムに響いた。急所はわざと外した。痛みともとれないほどの苦痛が神経を埋め尽くしているのだろう。その痛みには俺も身に覚えがある。しかしこんなものじゃない、こんなものじゃないぞ。仲間が受けた苦痛は。俺が受けた苦痛は。カムイはその黒いコートを脱いだ。中には真っ赤なスーツを着ていた。

「い、生き残りか…まさかとは思ったが…」化け物”め」

男は苦痛に顔を歪めながら、振り絞るように声を出した。眼にはさつきとは違った感情が映っている。そうだ、この眼だ。この眼が俺たちを…

カムイはためらわずに引き金を引いた。首から上が吹っ飛び、残った胴体とそこから枝のように伸びた左腕だけが残った。左腕は何かを捜し求めるようにしばらく空中を彷徨っていたが、間もなく諦めたようにぐったりと地面に落ちた。しかしその死を目の当たりにしても、カムイの憎悪は決して消えることはなかった。それは呪いのように彼につきまとい続けている。そして、いつ終わるとも知れない復讐の原動力となっていた。

ちょうど、彼の特異な心臓が果てしない魔道エネルギーを生み出しているように。

MISSION 1：潜入

男の遺体はアンダーグラウンド・トーキョーのスラム街、旧渋谷地区で発見された。名前はシンジ・オオムラ。元ジャーナリストで、あの3年前の事件では発端となった記事を書いた男だ。胸ポケットに当時の社員証があったのが身元につながった。ニールも3年前の事件当時、この男とは頻繁に顔を合わせた。その後の消息については詳しく知らないが、努めていたネット新聞社を解雇されたという噂は聞いたことがある。確か事件が一段落して人々の記憶から消えかけていたころだった。なぜ会社を解雇され、どういう経緯で地下に送られたのか、詳しい事情は何も分からない。

遺体は左腕と胴体以外がきれいに消滅していた。恐らくは意図的に残されたものだろう。理由についてはもうメディアで流されている通りだ。ここのとこ連続して起こっている「事件」関係者の魔銃による殺害。犯人は当時の関係者で生き残った人間の復讐という話がまことしやかに流された。それで本庁から魔道犯罪のエキスパート、魔道捜査1課のニール・クサナギがアンダー・トーキョーに派遣されたのだ。ようやく保安庁が事件解決へ向けて重い腰を上げた、というのがニール本人とマスコミの見解だった。

「間違いありませんね、同一犯です」一緒に派遣された鑑識のダイスケ・イトウは拡大した切断面の一部を見ながら言った。

「残留意思の波長が前の3件と一致しました。犯人の非常に強い憎悪が感じられますね」

「事件の生き残りかな、やっぱり」ニールは煙草に火をつけた。

「それを調べるのが刑事の仕事でしょう」ダイスケは振り返ってニヤリと笑った。「でもまあ、その線が堅いでしょうけどね」

「問題は…」ニールはそこまで言って白い煙をふーっと吐き出し

た。それはネオ・トーキョーの大地に遮られ、永遠に昼の来ない闇の中に飲み込まれるように消えていった。

「生き残りなんて奴が存在するかどうか、だ」

それにしても、久しぶりに見たアンダーグラウンド・トーキョーの景色はひどかった。人々は地面に座り込み、壁にもたれながら生氣を失った虚ろな眼で闇の中に浮かぶ何かを追っていた。ニールも彼らがみているものを見ようと空を仰いだが、吸い込まれそうなほどの深い闇がすぐ近くに迫っていて、思わず眼をそらしてしまった。人道的な立場からすれば、この人たちは救われるべき人間なのかも知れない。主に犯罪者を送り込んでいるとはいえ、彼らは二度と陽の光を拝むことを許されないのだ。そしてその子孫までもがこの暗い世界しか知らないまま一生を過ごす。時々正義感の強い誰かが、彼らの現状を訴えて救いの手を差し伸べるが、「活動家」と称され地下に送られた。そのうち、誰もが地下のことを見て見ぬ振りするようになった。

だが綺麗に整備された上の世界にいる限り、地下に住む人のことは海の向こうよりも遠い世界のことにように感じられる。実際、ここに住む彼らは同じ人間であるかどうかも疑わしいくらいなのだ。彼らの死に仕たって、普通なら保安庁の刑事が動くことは無い。法律すら適用されない世界なのだ。

忘れもしない、最後にここを訪れたのも3年前の事件のときだ。そして今回、俺が派遣されたということは…

「ニール刑事、行きますよ」

上へとつながる高速エレベーターが、2人の前で静かに扉を開けた。アンダー・トーキョー内の十数か所に設けられた高速エレベー

ターのみが、上と下をつなぐ唯一の移動手段だ。その出入り口は厳重に警備され、認められたものしか行き来はできない。

きつと上では、何十人のマスコミが俺を待ち伏せしているんだろうな……。対応に追われる自らの身を案じながら、ニールは小さくため息をついた。それでも、上の光と空気に触れると安心感が湧いてきた。決して有能とはいえない部下のコール・レイモンドが姿を現し、「お疲れ様でした」と声をかける。「皆様お待ちですよ、まるでアイドルですね」

「3年前の事件関係者で、地下に下りている人間のリストを作ってくれ」

軽口は相手にもせず、ニールは言った。コールは上司の機嫌の悪さを察知したのか、そそくさと高速エレベーターの警備室を後にした。

いいだろう、釣られてやるよ。

さっきまで自分がいた足元を見据え、ニールは心の中でつぶやいた。

MISSION 2 : 情報屋

アンダーグラウンド・トーキョーの旧品川地区にあるビルの一 corner、天井にも届きそうなほど高くそびえ立つビルの三十四階に、その男が住んでいた。もともとはオフィスビルであったが、商業などというものは彼の仕事などの例外を除いてはほとんど成り立っていないため、ここに人が住まうようになった。この地区はスラムと呼ばれる地区より体調不良を訴える人が少ないため、人口が集中して一つのコミュニティを形成している。コミュニティと言っても近所付き合いが盛んなわけではない。この人間は生きるために必要最低限の人間関係しか築かない。比較的恵まれている地域とはいえ、気力のようなものは吸い取られるように失われていくので、なるべく余計なことはしない、という生き方が自然と身についてしまった。そういうわけで、彼も仕事以外の時間は、何百年も昔のスポーツを見ながら充電するように静かに暮らしていた。

その日も、彼は仕事を終えてサッカーというものを観戦していた。誰が思いついたか知らないが、エキサイティングなスポーツだ。体をぶつけ合いながらボールを奪い、敵のゴールに向かって仲間とパスをつなぐ。よくもまあ昔の人間ってのは、こんな道楽に使う余分な体力があつたもんだと、感心せずにはいられない。しかしこのオフサイドというやつがイマイチ分からないんだよな。その時だった、オフィスの呼び鈴が鳴ったのは。「客」か、今いところなんだけど。ぶつぶつと文句を言いながら表に出ると、ここ半年くらいで常連になった黒いコートの男が立っていた。羽振りもいいし最近では一番の金づるだ。

「やあ、あんたか。」わざとぶっきらぼうに言うてみる。黒いコ

トの男は眉一つ動かさない。

「次の情報は入ったか、『情報屋』」

男は情報屋と呼ばれていた。仕事柄、本名は明かさない。というか、そんなものは生まれてこのかた持ったことも無いのだが。小回りの利く性格が幸いして情報を売るようになったその時、初めて情報屋という呼び名がついた。彼はそれを一つの誇りにしていた。

「あなたの知りたい情報は手に入れるのが大変でね、今のところはこいつだけだ」

情報屋は胸ポケットから出した紙を二本の指で挟んでひらりと舞わせた。

「いくらだ？」

「そうねえ、コレでどうだい」五本の指をいっぱい広げてニヤニヤと笑いながら情報屋は言った。だんだんと値段を釣り上げていく。しかし男は躊躇無く金をカウンターに置いた。もう少しふんだくれたかな、という思いを抱きながら金を受け取る。札の枚数を丁寧に数えた後、メモを差し出した。

ぼろ儲けだな、と思ったが顔には出さない。実はこの情報は自らの足で手に入れたものではなく、二日ほど前に訪れた男から仕入れたものだ。その男は初めて見た顔だった。客だと思っていたが、向こうから一方的に情報提供をしてきただけで帰ってしまった。しかしそのタダで手に入れた情報がこうして札五枚へと変わったのだ。自然と笑いもこみ上げる。

「あんた、カムイってんだろ？」

カムイと呼ばれた男は、少しだけ反応を示した。これがこの男が情報屋に初めて見せた動揺だった。しかしそれも一瞬のことで、すぐに冷徹な眼差しを返してきた。二日前に来た男から名前も教えてもらったのだが、口にするべきではなかったな…うまくいきすぎて油断したか、と瞬時に後悔した。

「どこでその名を？」

「俺を誰だと思ってる？情報屋だぜ」わざと強がって見せた。力じやかなわないかもしれないが、だからと言って屈しないというのが彼の仕事に対するポリシーだ。もちろん内心はヒヤヒヤしていた。しかし情報屋にはある予想があった。男の殺気は消えた。こいつはまだ俺を殺せない、情報屋の予想が確信へと変わった。

カムイはカウンターに置かれたメモを受け取り、「次の情報も探しておけ。一週間後にまた来る」と言い残して振り返った。やれやれ、辛気臭い男だ…。商売柄油断ならない客と言っるのはたくさんいるが、カムイのそれは異質なものに感じられた。誰もが闇を抱きながら情報を求めるが、奴のそれは

そこまで考えていたところで、情報屋は眼を見開いた。立ち去ったと思っていたカムイが振り返ってこちらを見ていたのだ。こんなことは初めてのことだ。

「この情報は、確かか？」眼に鋭さが戻っている。情報屋の背筋が凍った。

「あ、ああ、間違いない」

それだけ聞くとカムイはようやく立ち去った。姿が見えなくなってもしばらくは全身の力が抜けなかった。

奴のそれは、奈落のように深く、ねっとりとした不快感を纏っている…。

まさか、あいつがここにいるのか。あの忌々しい研究施設の科学者が

カムイは湧き上がる感情を押し殺せずにした。事件で関係者は全員死んだと思っていた。自分以外は。情報屋のメモにはこう書かれていた。

「ドノヴァン・ライヒワイン」

MISSION 3：ターゲット

深夜のテレビは昨日のニュースを映し出している。いかにも日本人風な黒髪の女性アナウンサーが、地下における一連の殺人について伝えていた。場面が切り替わり、ぶっきらぼうな男の受け答えがテレビから流れてくる。それはまるで自分ではない他人の言葉のように聞こえる。現段階では何も申し上げられません、現在捜査中です。あらかじめ用意していた答え以外は、全てこのように答えていた。上からの指示だが、恐らく頼まれなくても答えは同じだっただろう。俺だって何も知らないんだ、とニールは思った。アンダーで起きた事件をどうして我々が知ることが出来るのか？そしてなぜその情報がマスコミにまで流れているのか？

そんなこと、考えるまでもないじゃないか。

ニールはグラスに残ったウイスキーを一気に胃の中へ流し込んだ。吸いかけの煙草が細い煙を上げながらじりじりと灰に変わっていく。VTRが終わり、コメンテーターが知った風な顔であることないこと語り始めた。今回の事件で保安庁が動いたのは、年々高まるアンダーに住む人々の人権尊重の流れを、シティとして積極的に受け入れたという意思表示でもあります。ニールはふっ、と小さく笑い、テレビを切った。

エレベーターを降り警備室を出ると、予想通り無数のマスコミがニールを待ち受けていた。無数のフラッシュと質問がニールに浴びせられ、深い闇に慣れてしまった眼が眩んだ。これも仕事のうち、半ば諦めて腹をくくったつもりだったが、五分もしないうちに我慢の限界に達した。このときの顔が後でテレビで繰り返し報道される

と分かっていても、そうしないわけにはいかなかった。何も無ければ十分ほどの本庁までの道のりも倍以上の時間がかかった。二十八になっても我慢弱いところは変わらないな　ニールは全く動く気配のしない車内でひとりごちた。

本庁に帰ってもマスコミからの電話やメール、アンダーに下りたためにいつもより膨れ上がった報告書の対応に追われた。最近は上でも魔道エネルギーを犯罪に使う事件が多発している。原因は、やはりそれも三年前の事件に起因していた。「RED SUITS」と呼ばれた極秘特務部隊の消滅により、秘密裏に摘み取られていた犯罪の芽が、今ではすすくと育って大地に根ざしているというわけだ。一人で何件もの事件を抱え、そのほとんどは二人以下のチームによって対応させられている。

結局、ワンルームのアパートに帰ったのは午前三時。何を食べるでもなくとりあえず酒と煙草で昂ぶった神経を弛緩させる。もうずっとそんな日々が続いている。こんな姿、あいつには見せられないな

それにしても、体がだるい。血を失ったみたいに、全身に力が入らないけだるさ。そういえば鑑識のディスクもエレベーターの中でそんなことを言っていた。慣れない環境下ということか、もしくは他に何か理由が？三年前はどうだった…だめだ、思い出せない。

ニールは鞆の中に入っている電子書類を出し、コールの作成したリストを見直した。あいつにしては、やけに仕事が早いとは思ったが

リストと呼ばれたそれには、一人の人物しか拳がっていないかった。

「ドノヴァン・ライヒワイン…元保安庁魔道研究班のこいつが、

なぜ地下にいる？」

いくら考えても謎は謎のまま、ニールはアルコールによって得られた深い眠りの中へと一瞬のうちに吸い込まれていった。

翌日も悪いニュースから始まった。

「…何の冗談ですか、部長」ニールの大きな声が魔道捜査一課の小さな部屋に響いた。

「私は大真面目だ、ニール・クサナギ。いつから君は上司の命令に意義を唱えられるほど偉くなったんだ？」

部長と呼ばれた男こそ保安庁きつての魔道戦闘家、ダフティ・リンカーフィールドだ。綺麗に整った髪と黒縁の眼鏡はいかにも事務系を思わせる佇まいだが、銃を抜けばその速さと正確さは庁の誰にも負けないし、年をとって衰えたとはいえ、腕っ節でもそこの若造に負けることは無い。口調も穏やかではあるが、内に秘められた言葉の重みはニールを黙らせるのに十分だった。

「納得したのなら任務に就きたまえ。私も忙しい」納得などするはずがない。現れるかどうかも定かでない相手を捕らえるために、魔道捜査一課の人間が四人も張り込むだと？そんな大捕り物は配属されてこのかた聞いたことがない。それよりなにより、納得できないのは

「というわけなんで、よろしくお願いします。クサナギ先輩」

茶化したような声が後ろから聞こえ、まさかと思って振り向くとそこには案の定あの女がいた。女の名はレイ・アイルシュタット。ニールよりも二歳年下の後輩だ。長く伸ばした茶色の髪に、欧州的な端正な顔立ち。いかにもエリートといった出で立ちは、見た目だけに留まらず刑事としての能力にも現れている。捜査能力にしても同期はおるかこの魔道捜査一課においても抜きん出ているし、戦闘能力も高い。活発でさっぱりした性格からか、自然と周りに人が集

まってくるタイプで敵を作らない。実力についてはニールも認めている。それでも、彼は彼女とともに仕事をすることをこれまで拒否し続けていた。それは一課の中でも七不思議の一つとさえ言われるほどだったが、ニール本人が何も語らないため、かえって変な噂になったりもした。そんなニールの仕打ちにもかかわらず、レイはニールを慕っていた。

似てるんだよな、そういうところが。ニールはため息をついた。

「最近ため息多いですね、先輩」

「お前のせいだよ、後輩。もういい、行くぞ」このやりとりを始めるときりがないので、ニールは諦めて部屋を出た。

「それにしても急な話だな、昨日の今日で早速アンダーに下りて『ドノヴァン・ライヒワイン』の護衛に当たるとは」

ニールは真っ直ぐに伸びる廊下に焦点を合わせたまま、独り言のように言った。もちろん隣にいる女性に向かって話しかけたのだが。

「ところで君は、どれくらい情報を持っている？」

試すような口調になってしまったが、ニールにもそんなつもりはなかった。ただこの一連の事件はニールが一人で担当してきて、レイもまた別の事件をいくつも抱えていたので、情報を共有するため聞いたのだ。レイは質問の意図をくみとったように返した。

「私は報道されてるくらいのことしか知りませんが……」一息間をとる。ニールは煙草を吸いたくなくなったが、あいにく建物内は禁煙だった。この男はレイの間の取り方まで苦手だった。

「犯人は三年前の魔道科学第二研究所で起きた事件の生き残りでしょう。そして魔臓を埋め込まれた被験体に間違いありません」

前置きのわりにはつきりものを言う奴だ、とニールは思った。

「根拠は」

「殺害方法です。一人の相手に魔銃を三、四発撃っています。殺されたのは既に五人。アンダーにおいて魔銃のカートリッジを五個

以上手に入れないといけない計算になりますが、そんなことは事実上不可能です。アンダーにはマナ供給がされていませんし、カートリッジを作るだけの技術はありません」

ニールは無言だった。レイは「続ける」という意味だと受け取った。

「だとすれば、体内ではほぼ無尽蔵ともいえるマナを生み出す、魔臓の被験者が犯人としか考えられません。それに、残留意思には強い憎悪が感じられたと聞きました。第二研究所の事件の被害者ならば、その関係者に復讐するという犯行の動機が成り立ちます。それに……」

「それくらいの相手じゃなきゃ俺たち一課が四人も動員されるはずがない」

「向こうは誘ってきています」レイの声がさらに鋭くなった。

「あれほど憎んでいる相手を消滅させる力を持ちながら、あえて遺体を残しています。この殺人を続けることで、三年前の事件の黒幕を再び動かし、真相を明かそうということでしょう」

ニールは立ち止まり、息をふーっと吐いた。

「またため息ですね、幸せ逃げますよ」

「逃げるほどの幸せなんてねえよ」まったく、小難しいこと語った直後に小娘みたいなこと言いやがって、とまでは口に出さない。

「敵の撒いたエサにわざと食いつくんだ、針が刺されれば命はないぜ」

振り返り、ようやくレイに眼を合わせた。凄んだつもりだったが、レイは眼をそらさず、「望むところです」と返した。口元がふっと緩んだ。

「残りの二人はもうアンダーに下りて監視を始めています。急ぎましょう」

再び歩を進めるレイ。今度は彼女が前に立った。

全く、手際が良すぎるんだよ

脳裏をよぎる不吉な疑惑をとりあえず押し留め、ニールも後を追った。

MISSION3：ターゲット（後書き）

2008/10/16 すみません、本文かなり追加しました。

MISSION 4 : 戦闘

情報屋のメモによれば、その男は地下に潜伏しているということだった。

アンダーグラウンドのそのまた地下に潜ろうなんて人間は、カムイが知る限り一種類しかない。追われている人間だ。かく言う彼も半年くらい前までここに潜伏していた。カムイは懐中電灯を手に地下鉄の階段を下りる。上から時々流れてくる汚染された水が、ぴしゃつと音を立てて足元で跳ねた。まったく、先人はどでかいゴミ箱を作ったものだ。

化石燃料が枯渇したのが今からおよそ百年前。人類は数十年にわたり代替エネルギーを得ることができず、残り少ない資源を求めて世界各地で激しく争った。人口の半数が戦争と経済の停滞により死に至った頃、ついに化石燃料に代わるエネルギーが発見される。それこそが魔導エネルギー、通称「マナ」だ。マナの生み出すエネルギーは従来のそれを遥かに凌駕していたが、その力は一部の特権階級に独占された。人々はエネルギーを求めて都市へと集ったが、特権階級はマナの分配をせず、圧倒的な力を用いて都市を分厚い壁で囲い、蓋をしてその上に新たな都市を築いた。

東京においてもほぼ二十三区に相当する地域が封鎖された。三千万という人間を閉じ込めたまま。こうして東京は「ネオ・トーキョー」と「アンダーグラウンド・トーキョー」に分かれたのだ。水も人もネオ・トーキョーで汚れてしまったものは全てアンダー・トーキョーに排斥される。文字通り、臭いものに蓋をしたということだ。

人気がない地下鉄のホームから、今はなにも通らない線路の上に降りた。ここから線路沿いに歩くと無数の横穴が迷路を形成している。何の目的で作られたものかはわからない。蓋をされる前に作られたものだが、恐らく緊急時に要人を匿うためのシエルターだろう。カムイは懐中電灯を消した。ホームに久方ぶりの闇が戻る。風は無い。何百年も前のじめつとした空気が滞留し、カムイにまとわりつく。沈黙は耳鳴りのように鼓膜を振動していた。懐かしさすら覚える二年以上の潜伏期間。初めてここに来た時の俺とは違う、魔臓もそのエネルギーを十分蓄えた。復讐はこれからだ。カムイは秘めた決意を噛み締めるように再確認した。

そのエネルギーを左眼に集中させる。眼を見開くと何本かの微かなマナの残留意思が、糸を引くように風の無い空間をを漂うのが見えた。様々な色の残留意思が浮かんでいるが、どれも不安げな感情を表しているように見えた。

人が持つマナの残り香、いわゆる残留意思と呼ばれているものだ。普通の人間の肉眼で見えることはほとんどないが、カムイは魔眼と呼ばれる特殊な眼によってそれを見ることが出来る。カムイはその何本かに触れ、一つの残留意思を選び出して、導かれるようにその軌跡を辿った。皮肉なものだな、とカムイは思った。これを埋め込んだ張本人が、その機能によってもうすぐ殺されようというのだから。忌まわしいこの魔眼も、今は目的の為に最大限利用させてもらおう

意思の残り香は時々途切れそうになりながら、暗闇のより暗い所へとカムイを導いた。やがてそれが鮮明になった辺りから、人の気配が感じられるようになった。敵は近い。それにこの感覚は…

残留意思の糸は輝きを保ったまま、一つの小さな扉に向かって吸い込まれていた。扉は重い鉄製だった。いかにもシエルターといっ

た雰囲気だ。カムイは腰に装着していた魔銃を抜き、躊躇なく扉を撃ち抜いた。静寂を轟音が引き裂き、眠っていた音が目を覚ましたように鳴り響いた。爆風の中から二人の男が現れた。直撃は避けたようだ。

「全く、噂に違わず危ない人だ。カムイ・リーベルト」男の一人が口を開いた。目が異常に細く、歳は三十前後といったところか。もう一人カムイと同じくらいの年かさの男が陰湿な眼差しを向けている。背が低い上に猫背で、隙あらばいつでも飛び掛ってきそうな構えだ。

「ドノヴァン・ライヒワインはどこだ」

目の細い男はくくつと笑い出した。笑うとその眼はいつそう細くなったが、わずかに覗く黒めだ余計に鋭くカムイをにらんでいた。

「失礼、まだ博士に用があつたとはね。博士は私が殺しておきましたよ。あなたもその方が手間が省けるでしょう？それともせっかくこうして出向いたのに、私たちの相手はしてくれないんですか？」言われなくても、という言葉の代わりに銃を抜き、二発打ち込んだ。マナの閃光は二人の男を捉えたかに見えたが、二人はすばやい動きでこれを回避した。カムイはそれを見て細目に向かって一気に間合いをつめる。

「突然二度も発砲するなんて、礼儀知らずな人だ」細目はそう言う銃を抜き、カムイに向かって引き金を引いた。カムイと同じ、魔銃によるマナの圧縮発射だ。カムイはそれをくぐるようにかわし、細目を捉えた。

「もらった！」しかしその瞬間、違う殺気がカムイを襲った。猫背の男が思いもよらぬスピードで飛び掛ってきたのだ。猫背の男はしなやかな動きでパンチを繰り出す。目では追えていたが、予想外のスピードだったためにガードが間に合わず、腹部に一撃くらってしまう。なるほど、そして細目の魔銃が再び光を放った。カムイは間一髪でそれを避けた。

「コンビネーションか、俺が誘ったとはいえ、なかなか戦える奴

をよこしてくれるじゃないか」

「お褒めの言葉ととっておきましようか。あなたもさすが、元REDSUITSですね」細目は相変わらず笑っていた。しかし銃をしまうと、肩の辺りをぱんぱんとはたき、カムイに背を向けた。

「待て、逃げるのか。そうはいかない」

カムイは再び銃を構えたが、細目の男は手を振りながら言った。

「今日はこんなところでしよう、どうせあなたとはまた会えます。それに、のんびりしてるところこっちの増援が来ますよ。いくら魔臓があるとはいえ、三年のブランクで四人相手はさすがのあなたも辛いですよ」殺気はすでに消えている。猫背の男も最後までカムイをにらんでいたが、やがて再び舞い降りた闇の中にゆっくりと溶けるようにして消えていった。

確かに、思うような動きはまだ出来ていない。四人相手に勝ち目がないのもその通りだろう。俺はまだ、奴らの手の上で踊らされているのか……！カムイは怒りに震えながらシエルターのような部屋から去った。ドノヴァン・ライヒワインの死体が出口の先にいて、カムイを静かに見下ろしていた。その顔は小さく笑っているようだった。

MISSION 4 : 戦闘(後書き)

08/11/19 本文の一部を修正

MISSION 5：不気味な同僚

ニールとレイが現場に着いたときには、既に死体は悪臭を放っていた。それは滞留した重々しい空気のさらに一層下に漂っているように感じられた。トーキョーシティの最下層にあつてさえ、死臭とは他のどんな空気より不快で濁っていた。

「遅かったか…！」ニールが無念さを滲ませた。アンダーでは死体の腐敗が早いということが確認されている。現場の雰囲気も緊迫感を残しており、あと一步のところまで敵を逃したのだということがはっきりと分かった。レイにも彼の悔しさが手にとるように伝わった。普段はひょうひょうとして感情を表に出すことは少ないが、若くして魔導捜査一課に配属された刑事だ、隠されたプライドから滲む悔しさは人一倍強いであろう。レイも彼と同じ道を歩んでここに来ている、気持ちは痛いほど分かる。「で、アンタは何してたんだよ？」

ニールの鋭い視線が横にいる二人の刑事に向けられた。カルロス・アンダーグラフとフェイロン・サカモトの二人だ。カルロスはニールより若干歳上で、背が高くひよろつとしている。うさんくさいことこの上ない顔つきだが、瞳は不釣り合いなほど綺麗な緑色をしている。一見したらデスクワーク向きな外見だが、魔導捜査一課にいるということは戦闘能力も高いのだろう。

対してフェイロンは極端な猫背で（カルロスと並ぶといつそう小さくて不気味だ）、いつ飛びかかれるかも知れない体制で周囲に絶え間ない警戒の眼差しを送っている。得体の知れなさではカルロスも遠く及ばない。この男に捜査能力があるのかどうか、疑わしいものだ。ニールはどちらとも顔を合わせたことがあるくらいで、ほとんど話したことはない。ただ、カルロスは上層部から一目置かれているという噂だけは耳にしたことがある。

「そんな睨まないで下さいよ、ニール刑事。私達だって体張って護衛にあたっただんですから、ねえ」

フエイロンは小さく頷いたが、頭は全く別のことで満たされているような軽い相槌だった。敵が今にも襲いかかってきますよ、と言わんばかりに辺りに注意を向けている。

「一課の任務を甘く見てるの？ 戦闘の形跡はあるけど、時間稼ぎしたとは思えないくらい直線的な攻撃ばかり。手柄を焦って取り逃がしたみたいに見えるけど？」 レイの厳しい指摘にカルロスは、相変わらず困惑した表情を浮かべながら半分以上は笑っていた。「おっしゃる通り、私たちは時間稼ぎもできたでしょう。しかし彼はご想像の通り魔臓の持ち主です。手を抜いて戦える相手じゃない。それに私にだって功名心みたいなものはあります。援護を待つより先に敵を捕らえたいというくらいのもものはね」

カルロスの発言はいつにも増して軽かった。ニールが知る限り、カルロスは功名心なんてものから最も縁遠い人間である。実力でのしあがるというパワーよりも、したたかに上層部に取り入るタイプだ。そして発言はいつもフラフラとしていて実体がない。ニールやレイにすれば最もやりにくい相手であった。

しらばっくれると決め込んだ相手にいつまでも構ってられない、とニールは思い直し、その場を離れようとしたが、それをカルロスが呼び止めた。

「そういえばあの犯人、次はヘルムート・アンタレスを狙うって言ってたなあー、あの著名な魔導力学の権威を狙うなんて、彼の研究活動がよほど気に入らなかつたのかな？」

踵を返したニールの歩が止まる。しかし振り向かずと言った。

「何故それを知っている？」

「さあ、何故でしょう?」返答は予想通りだった。

「功名心とやらはどうしたのかしら、私たちを罠にでもはめるつもり?」レイが凄むとフェイロンの細い目と視線がぶつかり、一瞬殺気が辺りを支配したが、それも束の間、レイが歩き出したニールに従って後を追うと、空気は再び緊張感から解放された。

帰路、二人は無言だった。どうもアンダーという場所は生気を吸い取られているように、長居すると体がだるくなる、とレイは思った。それが蓄積した疲労のせいなのかどうかは分からない。しかし次こそ犯人を捕らえる。まずは本庁に戻り、ヘルムートの居場所を調べなければ。

光の見えない闇　繰り返される殺戮、見えない真相。しかしどこかに光はあるはず。この地下鉄に出口があるように

気が滅入るような地下鉄の出口からようやく地表に出た時、そこにある闇のように深い沈黙がようやくやく破られた。

「奴を何故信用するんですか?」レイは先行するニールに早足で追いつき、鋭い口調で問いただした。

「信用なんかするもんか」ニールは相変わらず前を向いたままだ。「だが俺達には今のところ奴の残した情報しかない。それに一応奴は捜査一課の仲間だからな」

ニールの発した「仲間」という言葉は不思議な響きを伴ってレイの耳に届いた。あんな得体の知れない男を仲間と判断したことに對する不信は何故か湧いてこなかった。ニールの仲間意識の中に、果たして自分が入っているのだろうか　そんな場違いな疑問に苦笑いしながら、レイは何も語らない背中を再び追いかけた。

MISSION 6：三組の来訪者

情報屋は自分の身に起こった出来事について考えていた。やけに来訪者の多い一日だった。いくら正確で新鮮な情報を取り扱う数少ない店とはいえ、一日に三組も来る日はない。この地下世界ではそこまで情報の価値は高くないし、生きることには精一杯の人間ばかりがたむろしてるこの街で、食べ物を通して置いて情報を買う奴などいない。

それにしても、なんてえザマだ。手にべつとりとついた黒い血を見ながら、情報屋は改めて思った。もう既に痛みなんてものは無い。手の施しようがないと体が判断したのだろう、激痛というアラームはつい先ほどから鳴るのをやめ、不思議と沸いてくる穏やかな気持ち心が支配していた。この商売が時として危険と隣り合わせなのは当然彼には分かってたいし、危険の臭いをかぎ分けてそこから距離をとる術も心得ていたはずだった。しかしなぜだろう、この一件に関しては俺はそのシグナルを見落としてしまったのか？ いや、違うな。俺はシグナルを見落としてなんかいない、恐らく背景にある深い闇を垣間見てしまったんだ。そこにはこの歪んだ世界を紐解く鍵さえあったのだ。そして俺は、そこから距離をとることを拒んで足を踏み入れてしまった。情報屋である俺が、知りたいと思ってしまうんだ。

その日最初に現れたのは、この間無償で情報提供をした男だった。前回していた真っ黒なサングラスをしておらず、一本の皺にしか見えないくらい細い眼が情報屋を睨んでいた。見た目は少し変わっても、情報屋は前に来たあの男だ、と瞬時に判断した。

「どうもお久しぶり。また無償提供頼むよ、あんたのおかげでがっばり稼げたからな」

いつもの軽口、この男に通用するとは思えないが。

「恐らく今日、カムイって男がここに再び姿を現します。商売繁盛ですなえ」何がおかしいのか、彼はくくつと笑った。そういえば前来たときもこんな口調で、終始人をバカにしたように笑ってたな、と情報屋は思った。

「そうかい、でも生憎奴に売れそうなネタはないよ」

自虐的な笑みを浮かべてみたが、頬は引きつっていた。予感めいた嫌な感覚が脳裏をよぎる。どういう理由かは知らないが、こいつは俺を経由してカムイって男に情報を渡したがっている。俺はそれに利用されている。利用されるっていうのは、どうも好きになれない。情報屋たるもの、すべての情報に無関係であることが鉄則だ。それでこそ情報の公正さが保たれるし、自分の身の安全も確保できる。だが、俺はどうやら巻き込まれちゃったみたいだな…。

「で、俺に情報をくれるのかい、くれないのかい」

男はまたくくつと笑った。まったく、見れば見るほど不気味な男だ。できることなら金輪際関わりたくないもんだ。

「人から提供されないと商品を手に入れられないなんて、プライドの無い情報屋もいたもんだ。しょうがないですねえ」細目の男は一枚の紙切れを寄越した。この前みたいに、人物名と潜伏場所が書かれているのだろう。情報屋はなるべくそこに書かれているものを見ないように紙を受け取った。そんなことはきつと慰めにもならないうらと理解してはいたのだが。「じゃ、彼によろしく」という奴の声は廊下の奥から聞こえてきた。情報屋はほっと胸をなでおろした。

それから数時間もしないうちだった、カムイという男が店を訪れ

てきた。相変わらず黒いコートに身を包んでいる。コートの隙間から真っ赤な服が覗いていた。そこから一瞬殺伐とした雰囲気を感じ、情報屋はたじろぐ。いい加減にしてくれ、どいつもこいつも辛気臭いツラしやがって

「おい、次の情報はるか」

投げかけられた言葉はいつもより尖っていて、下手に触れたらばつかりと斬られてしまいそうだった。こういう時はあまり駆け引きに興じない方がいい、と情報屋は思い、何も言わずに細目からもらった紙を差し出した。カムイはそれを受け取り、開いてざっと目を通した。近付くとカムイの放つ不快感はよりはつきりした形をとった、これは殺意だ。この間も感じた感覚、利用価値があるはずの情報屋ですら瞬時に殺してしまいそうなほど尖った感情。しかし今日のそれはこの前とは少し違う、鞘に収められたばかりの刀のように、さつきまで全力で解き放っていたものの残り香がそこに漂っているみたいだ、そんな感覚だ。

「この情報、誰から仕入れた？」

出し抜けにカムイが言った。虚を突かれ動揺が表情に表れたのも一瞬、回転のいい頭が答えを弾き出す。「それは言えないな、わかるだろ」

「だろうな、だがお前が自力で手に入れたものじゃないだろ」
「凶星だった。まあどっちだろうと同じことだ。また次も頼む」
「そう言うとカムイは立ち去った。後には死臭のようなものすら漂っているみたいだった。代金を受け取り忘れたことにさえ、情報屋はしばらく気付かなかった。」

この日三組目の客は一人ではなかった。黒いスーツの男が四人、何も言わずに情報屋の仕事場に入り込む。歩き方は機械的で、明らかに訓練されたものだった。カムイが去ってまた二時間後のことだ。不穏な空気を察知して情報屋は裏の非常階段から一階を目指したが、

階段は既に包囲されていた。四人は何も言わずに情報屋の腹部に三発、銃を撃った。通常の銃弾だった。何で頭を撃たず腹を狙ったのかよく分からなかったが、それは十分に致命傷だった。銃を撃たなかった男が振り向くと、他の三人もそれに追隨した。苦痛によって視界は閉ざされ、四人の後姿が情報屋の目に映る最後の情報だった。

ヘルムート・アンタレス、と紙切れには書いてあった。魔道力学の第一人者で、確か魔臓発案者だったな、とカムイは記憶を辿った。面識は無いが、あのいまいますしい研究に關与していたのは確かだ。現在はアンダー・トーキョーのスラム街でひっそりと生きているらしい。潜伏場所の下には違う筆跡で「細目の男」と書いてあった。情報屋が書き足したのか？細目の男…心当たりは一人しかいない、ドノヴァン・ライヒワインを俺に先んじて殺していた男。急がないと、また先を越されるかも知れないという焦りが、カムイを急がせた。また奴と相對することになったら、次こそは！！

強い決意を胸に、カムイは拳を強く握った。

MISSION 6・三組の来訪者（後書き）

08/10/26 不適切な表現を修正しました。

MISSION 7：待ち伏せ

ヘルムート・アンタレス。魔道力学の第一人者で、ネオ・トーキョーの魔道エネルギー式人工臓器の立案及び研究を一手に任された男。彼に任された広大な実験場、シテイ直営魔道力学第三研究所は表向き魔道エネルギーの平和的利用を模索するという目的になっていたが、内情は軍事利用が目的であった。魔道エネルギーを最大限活用した兵士を作り出す研究。しかし三年前、保安庁はそれを察知し、人道的見地からこの第三研究所を襲撃・殲滅した。運よく襲撃を免れた十数人を除き、研究者・被験者合わせて死者八百十九名、行方不明者はゼロ。隣にいるニールも参戦したこの事件の生き残りが、生き残った十数人の関係者を次々と殺害している。そして次のターゲットは、第三研究所元所長のこの男：数々の悪の所業に手を染めてきた、ヘルムート・アンタレス。資料にあったデータを思い返し、この男が殺されたとしても当然か、という思いがレイの頭をよぎる。

ニールとレイはスラム街にある彼のアパートを見張っていた。昔は広大な商業用施設として使われていたこの建物の、ある部屋に彼はいた。対象までの距離は二百メートルといったところか、彼にももちろん気付かれてはいない。ヘルムートは呆然とした格好で壁に寄りかかっている。時々ごそごそと缶詰をほじくっているが、それ以外に動きらしい動きはほとんど無い。野心に対して忠実に生き続けたであろうこの男の生气ですら、例外なくこの深い闇に吸い取られている。アンダーとは人類の絶望の井戸みたいなのところなのだ。

しかし三年前の事件、直接担当したわけではないが、不可解な事件だったな、とレイは今でも覚えている。資料に書いてある事実はまるで継ぎ接ぎだらけの断片的な説明に終始し、よくもまあこれで事件が解決したなどと嘯《うそぶ》けるものだと思う。軍事転用の

研究なら保安庁が絡んでいないはずはないし、保安庁は”人道的見地”など持ち合わせてはいない。しかし誰もが明らかな疑問を抱きながら表に出さないように生きている。この胡散臭さが逆に「手出しするなよ」という何者かの警告に思えてならない。

もしかしたらこの復讐者の出現が三年前の事件に光を投げかけてくれるのかも　しかしその考えを見透かしたかのようにニールが言った。

「俺たちの任務は犯人の確保だ。余計な詮索はするな」

相変わらずレイのことが苦手なんだな、と思われる抑揚の無い声。レイは思わず苦笑してしまった。よもや自分が嫌われているなどは思っていないが、ここまで不器用な接し方をする男もいない。もしかしたら、という思いが無いわけではないが、女の勘はそれを否定している。ならなぜ　なぜあなたは私を遠ざけるのですか？　口に出したつもりは無かったのだが、思わず言葉が漏れてしまったようだ。ニールは驚いたように真っ直ぐレイを見て、何か言葉を探している。ニールの脳裏に忘れたくても忘れられない過去が浮かび上がり、目の前の女に重なりあう。

崩れかかった建物、響き渡る怒号。俺はあいつを、親友と思っていたあいつを、愛する女性を撃ち殺したあいつを…撃てなかった！！そして二人を失った。

「似てるんだよ、お前は」ニールは目を背け、絞り出すように言った。うつむき加減の顔に暗い影が落ちている。他の女性と比べられている、という事は瞬時に分かった。しかしそれがごくありきたりな過去の男女関係ではないことは、ニールの表情に表れていた。怒りとも憎しみとも取れる複雑で暗い感情。それは今を生きているようにマールブル状の渦を巻き、ぐるぐると複雑な図形を描いている。

「昔の女に、ですか」

「そうだな、ただの同僚ではなかった。でも死んだ。俺の親友に

撃ち殺された」

レイは絶句するしかなかった。淡々と話すニールの言葉の隅々に、やはり複雑な感情が渦巻いている。「どうして…」

レイの言葉をニールが遮った。目にはいつもの鋭さが戻っていた。視線の先には 黒いコート の男。一歩一歩、ヘルムートに近づいていく。その姿は死を宣告する死神のようだった。

「チャンスです！」

「シッ！何か話している！！」

暗がりでは顔は見えず、遠すぎて声は聞こえない。ニールはあらかじめ仕掛けておいた集音機の受信イヤホンに耳を傾けた。ノイズの川から確かに男の声が聞こえる。会話までは聞き取れないが、かろうじて声は聞こえる

「この声は、まさか…」

ニールの眼が見開かれるのを、レイは確かに見た。

MISSION 8：明かされる過去

「そろそろ来る頃だと思ったよ。お前さんが私を殺してくれるんだろ」ヘルムート・アンタレスの声には恐怖や絶望は感じられなかった。もうすぐ訪れるであろう死を歓迎してすらいるようだ。その落ち着き方は少なからずカムイを不愉快にさせた。

カムイはヘルムートと面識は無い。第三研究所の元所長で、自らの欲望を満たすために多くの人々の体をいじくりまわし、モルモットのようを使い捨てた下劣な男だということは分かっていた。所長であれば何か他のターゲットに関する情報も持っているかもしれない。

「なぜ貴様が生き残っている？三年前の襲撃で死んだはずじゃなかったのか」カムイは魔銃を真つ直ぐに構えた。後で知った公式発表で、当時所長のこの男は死んだとされていた。

「殺されるはずだったさ、私もな。しかし彼らは私をもうしばらく生かした。研究の成果を完全に受け取る僅かな時間だけ、な。その後はこのザマだ、生き残るなんていいもんじゃない、体は生きていても死んだようなものさ」その口調にはいささかの淀みもない。銃を突きつけられても全く臆していない。そのことは余計にカムイを苛立たせた。

「当然の報いだ。貴様のしたことはこの程度の苦しみで償うことはできない」

「お前には分からんさ、確立された理論を手にした学者の気持ちはな。私を突き動かしたのは純粹な好奇心だけだ。そして私にはカネと設備が足りなかった。理論を思う存分実践できる場が提供されれば、誰だって私と同じことをした。それがたまたま私だったというだけだ」

この男には贖罪という二文字は存在しないのか。ついに怒りは力

ムイの語気を強めた。

「その純粹さが多くの人々の命を踏みにじつた！」

「だがお前も同じことをしている」あくまで冷静なヘルムート。

「間違えてはいないと言うのか！」

「間違つた方に利用されただけだ。私は間違えてはいない。私は、私の理論は完璧だ」

「ならばなぜ三年前の事件が起こつたんだ！戦闘マシンに改造された俺たちはみんな精神をマナに乗っ取られて死んでいった。それが貴様のいう完全な理論なのか！！」

ヘルムート・アンタレスはそこでようやく口ごもつた。突きつけられた銃など目に入っていないように、真つ直ぐカムイの瞳を見つめている。「美しい眼だ…君の被験者ナンバーは？」

カムイは無言で鎖骨の辺りを露にした。ほっそりとした骨の下に「X0171」と刻まれていた。第三研究所の被験者を管理していたナンバーだ。

「X0シリーズこそ私の理想、完璧な理論の具現だよ。現に君はマナに乗っ取られず正常な精神を保つたまま今も生きているではないか。いいかね、これだけは伝えさせてくれ。そのために私は今まで生き長らえてきたのだから」カムイは銃を向けられたこの男の眼がまだ死んでいないことに気がついた。ここに住む者たちとは根本的に違う眼。生きる意味をもってその光を宿している眼。

「君は精神崩壊した君の仲間たちと同じと思っっているようだがね、それは違う。少なくとも私の理想は魔臓をあくまで平和的に利用することだった。しかし、保安局とシティ議会・皇室はそんな悠長なことに金を注ぎ込んだりはしない。奴らはあくまで軍事転用を前提とした研究を進めていたのだ。自らの意思も持たず、圧倒的な魔道エネルギーを駆使する戦士の作成、それこそがあの第三研究所で行われていた実験だよ。ドノヴァン・ライヒワインなんかはその筆頭だったな、君の仲間たちはその被害者だ」

ドノヴァン・ライヒワイン、前のターゲットの名前が、ヘルムトの話の信憑性を不思議と高めたようにカムイは感じた。

「彼らの研究の結果こそが三年前の事件の真実だよ。それは君も知っての通りだ。もちろん彼らの研究にしたって基礎技術は私の提唱に基づくものだし、いまさら言い訳するつもりはないがね。しかし私は隠れて軍用ではなく、平和利用のための魔臓を作った。それが”XO”シリーズだ。そして君が私の理論の正当性を証明しにここへやってきた。君は戦闘マシーンなんかじゃない、私はそれで満足だ。さあ、私を殺したまえ」

カムイは明らかに動揺していた。フィードバックする三年前の映像、俺は、自我を失いかけた彼女を、彼女を撃ち殺した。彼女は言った、「私を、殺して」と。彼女の顔はくしゃくしゃに歪んでいた。体内で暴走するマナに乗っ取られそうになりながらも、必死に自分を保っていた。それが長く続かないことを知りながら。

俺は魔銃の引き金に指をかけた。もう躊躇わないと決めたはずの指が震えている。戦うという唯一の目的に為に鼓動を続けるもう一つの心臓に、これまで翻弄されながら生きてきた。俺には戦いしかないのだと言い聞かせてきたが、どうやらそうではなかった。ほんとうに俺はこの男を殺さなくてはいけないのか？

刹那、マナの光がカムイを包んだ。不意を尽かれたカムイの体が脆くなった壁に打ち付けられる。黒のコートがマナの光を吸収し、じわじわと燃える煙草のように消滅していく。

光の先には女、そして…

「お前は…ニール、ニール・クサナギ!!」

MISSION 9 : 決着

ニールの見開いた眼は黒いコートの男だけを捉えていた。まさか、二人は顔見知りなのか…レイも目を凝らしたが、暗闇で顔までは判別できない。

「ヘルムート・アンタレスが危険です、飛び込みましょう！」しかしレイの声はニールに届かなかったようだ。ニールはノイズの中から声を拾うことに集中している。音はやがてヘルムートと思しき声が多くなっていく。

「ニール！！」レイの平手がニールの頬を打つ。大きい声も音も出さないようにしなければいけないが、かまっている場合ではなかった。ニールがようやく正気を取り戻す。その時だった、コートの男の体がこわばった。引き金に指をかけたのか

「私が先行します！」

レイは魔銃の安全装置を外し、カートリッジの接続を確認して、距離を詰めて瞬時に発砲した。マナの鮮明な光が暗闇を切り裂いて黒いコートの男を捉える。やった、という思いも束の間、魔道エネルギーに消滅するはずの体がまだそこに在った。コートだけがじりじりと消え、あとから真っ赤なスーツに身を包んだ男が現れ、真っ直ぐにこちらを見ている。その顔は一瞬の殺気の後、驚きの表情に変わった。

「お前は…ニール、ニール・クサナギ！！」

しかし返答の代わりに、ニールは発砲した。二発目の光がカムイに向かつて、緩やかなカーブを描きながら飛んでゆく。カムイはそれを常人離れした瞬発力でかわし、銃をニールに向けた。

「お前、なぜまだ保安庁なんかにいる?! 抜けるといったはずだ！」

「うるさい！裏切り者のお前の意見など…!!」

ニールは更に二発打ち込んだ。逃げ場を失ったカムイはその二発の光弾に向けて光を放った。相殺されたエネルギーが衝撃波となってそこにあるものを薙ぎ払う。ニールはなんとか受け身をとって体勢を立て直したが、カムイはそのまま闇の奥へと吹き飛ばされた。ヘルムート・アンタレスもそのとばちりを受けて壁に打ちつけられた。空気はまだビリビリと激しく振動している。

「ニール先輩、冷静になってください！あなたらしくもない！！」
レイが吹き飛ばされたニールに駆け寄る。ニールの魔銃に装着されたカートリッジは”残量ゼロ”を示している。大量の魔道エネルギーを打ち出す魔銃は、一つのカートリッジで三発までしか連射ができない。魔臓という魔道エネルギー増幅装置を体内に持つカムイと比べれば明らかに不利だ。

「これが冷静でいられるか…！カムイは、あいつが俺の大事な人を…！！」次のカートリッジを装着し、再びカムイに向かってゆく。レイも後から援護に回る。こちらが有利なのは人数だけだ、突出させるわけにはいかない。

カムイは再び向かってきたニールの姿を確認し、再び発砲した。

同時に光弾の陰に隠れ、一瞬で距離を縮める。

「違うんだ、ニール！！」

「何も違うない！お前がアカネを殺した！」

ニールの右手がカムイの顔を捉える。しかしカムイはそれを軽々とかわすと、ボディに重い一撃を見舞った。魔臓の力は基礎的な身体能力を飛躍的に向上させる役割も担っている。瞬発力やパワーでは勝てるはずがない。しかし

「先輩っ！！」

レイの正確な援護射撃が再びカムイを襲う。ガードは間に合わない、と咄嗟に判断した体が魔銃による相殺を再び狙った。至近距離で二つの光弾が炸裂し、カムイの真っ赤なスーツが宙に舞う。ニールも再び衝撃波の直撃を受けた。「うっ！！」

「先輩っ！無茶しないでください！！」レイがカートリッジを素早

く交換しながらニールに近付いた。

「…奴は、奴はどこだ！」ニールは痛みで顔を歪ませながらカムの姿を探している。魔銃には最後のカートリッジが装着された。

「一度退きましよう、やはり二人では荷が重すぎます！体勢を立て直して…」

「俺は奴には負けられない…これ以上負けてたまるか！」ニールをこれほどまでに感情的させるあのカムイという男…一体何者なのだ？レイの知る限り、ニールは我を忘れて突出するような短絡的な男ではない。純粋な好奇心もあつたが、今はこの男に冷静さを思い出してもらわなければならない。なんとかしなければ　とレイが頭を巡らせている時だった。

「ニール！聞こえているなら退け！そして保安庁を抜ける！」どこからか、カムイの声が響いた。反射して位置までは特定出来ない。

「お前だつて気付いているはずだ、俺達にのしかかった運命の全ての元凶は保安庁にあると！」ニールはカムイの声に異常なくらい反応を示した。声の主を探して目がギョロギョロと動いている。恐らく敵は自分達の位置を把握しているだろう、とレイは考えていた。残留意思を視ることができる眼の研究が第三研究所で行われていたと聞いたことがある。被験者ならば暗闇の中から自分達の残留意思を追うことは可能と考えた方がいい。

「運命だと…その銃でアスカを殺した男が何を言う！お前こそ復讐なんてやめて投降しろ！それともここで俺に撃ち殺されるか！」

ニールは再び飛び出し、見えない相手に向かって叫んだ。レイも諦めて護衛につく。位置を掴まれているなら隠れたって無駄だ。

すると向かいの瓦礫から真っ赤なスーツに身を包んだカムイが現れた。右腕にダメージがあるようだが、戦闘力の差を埋められるほどではない。左腕は確実に二人を捉えている。

「残念だよ、ニール。お前が冷静ならもう一つ気付いているはずだ。俺には敵わないと」

崩壊していく世界が眼前に広がっていく景色を、ニールは垣間見た。眩しすぎるほどの光量をもった大量のエネルギーがスローモーションで近付いている。

その後のことは、何も覚えていない。

MISSION 9 : 決着 (後書き)

ご愛読ありがとうございました。

まだまだお話は続きますが、これからカムイとニールの過去編 (仮名) に入る予定です。

今後ともどうぞよろしくお願いします。

M I S S I O N 1 0 : フラッシュバック (前書き)

ここからニールとカムの過去の過去が明らかになります。どうぞ楽しみましょう。

MISSION 10：フラッシュバック

そこには確かに輝ける未来があった。

アジア連合の首都、トーキョーシティの保安を一手に担う保安庁、倍率七千倍と言われる狭き門をくぐり抜けた時、ガラス張りの本部ビルは後光を受けて神々しく輝き、若者たちは皆待ち受ける未来が明るく栄光に満ちたものだと思っていて疑わなかった。

彼らの顔には、そこで待ち受ける数々の試練さえ、自らを成長させるための糧であり、彼らの自信を飾る一ページなのだ、といわんばかりの誇りと自信に満ちていた。彼らのために春を告げる桜は咲き乱れ、昨日まで空を覆っていた不吉な雲は去り、まだ肌寒さを含んだ風は口笛を吹いていた。世界は一点の曇りもないこの青空のように完璧で、疑いようもないシステムによって保たれていた。これからはその完璧なシステムを守り、維持していくのが彼らの仕事になる。

ニール・クサナギもまた、そんな若者らしく果てしない希望を胸に抱いていた。一刻も早く手柄を立て、花形とされる捜査一課へのしあがる。しかも普通の捜査一課ではなく、年々増加する魔導犯罪を取り締まるべく設立された魔導捜査一課だ。親父もここにいて、そして殉職し英雄になった。ついに遠かった父親の背中が見え、ニールの功績に対する想いはますます強いものになっていた。

ニールはふと視線を感じて顔を上げた。

同時に相手は顔を伏せてしまったので眼は合わなかったが、どの男かはすぐに分かった。同期の中で唯一、眼に希望の光が宿っていない男。ニールよりも純日系な黒髪に平均的な体格、真つ黒な瞳。トップ合格との噂もあるが、真相は定かではない。何よりニールが

感じたのは、にじみ出るほどの決意と使命感だった。それは他の同期が放つものよりももっと深く、暗く、ネガティブなものだとニールは感じた。

カムイ・リーベルト。彼の名だ。思えばここから、ニールとカムの運命の歯車がぎしぎしと不吉な音を立てながら回り始めたのである。

M I S S I O N 1 0 ・ フ レ ッ シ ュ バ ッ ク (後 書 き)

2 0 1 0 ・ 1 0 ・ 3 恥 ず か し な が ら タ イ ト ル ナ ン バ ー を 訂 正

MISSION 11：実地研修

「おい研修生、無茶はするな!!」

無線がノイズ交じりの怒声を発した。

分かってますって、と心の中でつぶやいたニールは、逃げる男を追いかけて路地裏を駆けていた。カッカッカツという二つの足音が、不吉な振り子のように暗黒の住宅街に響いている。その距離は着実に縮まっていた。

ネオ・トーキョーにおける犯罪者とは、完璧に管理されたこの世界の異端である、我々はその完全性を維持する平和維持部隊だ、これは研修期間において念仏のように聞かされたセリフだ。ニールはその忠実なる実行者になるべく実地研修に臨んでいた。目の前10メートルほどに追い詰めた所で、その異端は振り返ってニールを睨んだ。

「何だよ、よ、よく見りやあまだガ、ガキじゃねえか…」息を切らしながら発した言葉にはもはや威圧感はなく、強ばった体はガタガタと震えていた。しかしなんとか勇気を振り絞って拳を握り、ニールに向かって振り下ろした。ニールは冷静に軽くいなし、逆に腕をとって背中に回した。頭で考える前に体が反応したのは、持ち前の格闘センスと入社以降の厳しい研修の成果だろう。ほどなく男の小さなうめき声とともに、体が膝からガクツと地に落ちた。

「ホラ、もう観念して仲間の居場所喋りな。それとも本庁でイカツイ刑事の拷問受けたいかい？」

ニールは平然とした口調で言った。

「…わ、分かったよ。話す、話すからまず手をどけてくれ。それと情報提供者保護法の適用を…」

「そーはいかねえなあ！」言葉を遮った、背後からの若い男の声。振り向くといつの間にか仲間とおぼしき男が銃を構えて立っていた。

「ドミニク！た、助けにきてくれたのか！」地に伏した男がわかに威勢を取り戻す。

「オツムの足りないサイファさんよお、俺も助けてやりたいのは山々だがな……」

続く言葉の代わりに銃声がニールの耳を襲った。銃弾はサイファと呼ばれた男をかすめて後ろの壁に突き刺さった。「仲間の名前をあっさりバラしちゃうような奴は一回死んだ方がいいぜ！」

ドミニクは麻薬の売人であるサイファの始末人、とニールは見当をつけた。発砲は威嚇のつもりではないだろう、相当ラリってるので狙いが覚束ないだけだ。だがやたらめったら発砲されるのも困る。万が一にも大事な証人を失うわけにもいかないしな。一瞬の思考の後、ニールが銃に手をかけたその時だった。二発目の銃声が轟いた瞬間、ドミニクはのけ反り手に持っていた銃を地面に落とした。ニールはその隙を逃さず、一気にドミニクとの間合いを詰めると、腹部に強烈な一撃をお見舞いした。

「かは……」鈍い音がしてドミニクの体が宙に浮く。そして叩きつけられるようにして地面へと落ちた。

「相変わらずえげつないパンチしてんのね、ニール・クサナギ」
少し先の物陰から一人の女が姿を現した。

「お前こそ射撃の腕はさすがだな、アスカ・イチジヨウ」

保安庁に入ってから二ヶ月が過ぎた。本庁内部での研修が終わり、実際に新人を三丁四人のグループに分け、保安庁の各部署で実際に業務体験する実地研修が始まった。体験と名がついているものの、やることは実際の任務と全く変わらず、ニール達も既に先輩刑事の手を離れて捜査を行っている。ちなみに、この研修における評価が配属に大きく影響するというのは既に周知の事実だ。成績によってグ

ループ毎に得点が与えられ、点数によって将来が左右されるとなれば、新人同士とはいえ競争は激しい。

「それにしても、どうしてここが？」

「カムイが教えてくれたの。彼が犯行グループのアジトを突き止めて、仲間の居場所を聞き出したのよ。それが始末人のドミニクって男で、吐かせた情報をもとに追ったらあなたがいたってわけ」

この言葉にニールはかなり落胆したようだ。

「じゃあ俺はあいつに出し抜かれたってことか」自嘲的な言葉にアスカはふつと笑って言った。

「ほんつとに負けず嫌いねえ。同じグループなんだし、勝ち負けは関係ないでしょ。それにあなたがいなきゃ人一人殺されてたかも知れないわ」アスカはサイファに視線を投げた。

彼は未だに頭を抱えて地面にうずくまったまま、ガタガタと震え続けている。全く、こんな臆病な男がよくもまあ麻薬犯罪に荷担なんてしたもんだ、とニールは思った。最も最近生活苦を理由に犯罪に手を染める人が多い。そういう人間は犯罪グループに都合のいいように使われ、やがて捨てられる。今回の事件もそのパターンだろう。

「さ、カムイとアレクが待ってるわ、後は保安部に任せて行きましょ」

アスカが屈託のない笑顔で言った。銃を握っているときとはギャップのありすぎる眼差しに、ニールは思わず顔をそらした。どこかの大企業で受付でもやってそうな、品のある顔立ち。たちまち彼女は同期内でもアイドルになった。しかし内に秘めた心の強さは、短い付き合いだがニールもよく知っている。負けず嫌いだって俺に劣らないくせに　ニールは心の中で呟いた。

「やあ、遅かったな。二人で茶でもしてたのか？」本庁に戻ると、

待ち受けていた担当教官のデйм・グリックがニヤニヤしながら二人に声をかけた。

「なわけないじゃないすか……」ニールにとってはこれが精一杯の答えだった。デймはその反応に十分満足したようだ。

「にしても無茶してくれるなあ。一步間違えりゃ死んでるんだぞ、お前」恐らく無線が無視したことを言っているのだろう。そういえば返事してなかったな、とニールはようやく気付いた。

「まあいいや、あとの二人はもう部屋にいるぜ。反省会したら今日はもう宿舎に帰りな。ご苦労さん」

「あれ、先輩は参加してくれないんですか？」アスカが残念そうに言った。

「俺もそれほど暇じゃないってことよ。最近は犯罪の質も変わってきてるしな。ま、受け持ちがお前らみたいな優秀な班で助かったぜ。じゃあな、また明日」デймはそれだけ言うとそのくさと外に出てしまった。普段はさほど忙しい素振りも見せない人だが、さすがに多忙なのだろう、と二人は納得した。こここのころ魔導工エネルギーを悪用した犯罪が増えている。デймもまだ三年目の刑事だが、つい先日補充のために魔導捜査一課に異動したらしい。

「さ、行きますかね」ニールとアスカは残りのメンバーが待つ部屋へと向かった。

新人実地研修グループFはニール・クサナギ、アスカ・イチジヨウの他に、アレクサンダー・ウィンヒル、そしてカムイ・リーベルトの四人で構成されていた。このカムイ・リーベルトこそ、トップ合格と噂の男。そして入社式で目が合った、他の新人とは違う雰囲気を持ったあの男だ。

そしてこの男を中心に、これからF班は残酷な運命へと導かれていくのである。

MISSION 12：合流

ピーっという不吉な緊急呼び出しの警告音によって、ニールのさやかな仮眠はぷつぷりと途切れた。時計の針は午前三時を少し回った所を指している。やれやれ、一時間も寝てないじゃないかと思いつつも携帯を手に取り、受信ボタンを押した。呼び出し人は見るまでもない。

「何だ？」声はかれているが意識ははっきりしている。これも訓練の成果なのか、この何カ月かで警告音を聞くと一瞬で目が覚める癖がついてしまった。

「銃取引の情報を得た。至急合流してくれ。座標はすぐに送る」かねてから追っていたマフィアのでかい取引の件だ、とニールはすぐに察した。短い言葉が事態の重さを暗示している、と言いたいところだが、あいにくカムイはいつでもこんな調子だ。

「至急って、こんな時間取引かよ？」

「アスカもアレクも別件で出払ってる。仮眠の邪魔をすまないが、協力してくれ」

有無を言わず通信は途切れた。拒否する気なんてさらさらないが、こここのところのカムイのリーダーぶった発言に、ニールは苛立ちを募らせていた。そうでなくとも極度の疲労と寝不足が拍車をかけ、大人気ないとは思いつつも最近はつい余分な一言を口にしてしまう。

ニールは一つため息をついてから、送られてきた座標等の情報に目を通した。相変わらず一切の過不足のない文面に、ニールは苦笑した。優秀なのは認めているんだがな。大人になれば失うと思っていた嫉妬という感情。いいさ、必ず追いついてやる、と改めて誓い、ニールは仮眠室を出た。

「悪い、遅くなった」

ニールは保安庁所有の魔導車に乗り込みながら言った。詫びるほど時間は経っていなかったのだが。カムイは読みかけていた本を隠すように閉じた。

「魔導力学の専門書か？珍しいもん読んでるな」ニールは覗き込みながら言った。

「知識は多いにこしたことはない。知らないよりはな」相変わらずつれない口調だ。

「世の中には知らない方がいいってこともあるぜ」

「本気でそう思っているのか？」ニールは軽い返事のもりだったが、カムイの真剣な口調に驚いた。何を聞かれているのか見当もつかない。刑事たるもの全て知らなきゃいけないってことか？ニールは返事に窮したので話題を変えた。

「にしてもこんなでかいヤマ、俺達だけで抱え込んで大丈夫なのか？かなり大掛かりな取引なんだろう」

「デйм先輩達も忙しそうだからな。それに点数のこともある。早いとここの班に追い付いておきたい」

C班にはヒロ・ミツナガというカムイに負けず劣らず優秀な同期がいて、ポイントランキングでトップに立っていた。個々の能力で言えばカムイのが上だが、人を使う能力という一点がグループとしての得点の差に表れてしまった。

「仕事熱心だな。こんな働き屋がいるなら犯罪だってもっと減っても良さそうなものだ」

「じゃあ君はなぜ犯罪が増え続けていると思う？」

軽い発言が重い質問となって返ってくる。

だからこいつは苦手なんだ、と改めてニールは思った。

同じ班になってからというものの、試されているような上から目線の質問がニールは気に入らなかった。そんな難しい話について考えたことないだろう、と言っているように聞こえるのは劣等感によるも

のなのかも知れない。しかし彼の質問には、ニールの心の深い部分に積もった靄を探るような感じがあった。無闇に掻き乱されている不快感、これが苛立ちの一番の理由なのかも知れない。

「この世界は完璧に管理され、完結しているとお偉いさんは言う。しかし一方で異端と呼ばれる犯罪者も多く存在し、犯罪発生件数も年々増えている。この矛盾は何だ？」

ニールはそんなこと考えたこともなかった。言われてみればごく当たり前の疑問なのに。

「分からないな、答えは？」

「世の中には知らない方がいいこともある、だろ。さ、そろそろあちらさんもお仕事の時間みたいだ」

ニールは顔を上げると、何台もの車が前方の工場跡に向かって集まっっていく光景が目飛び込んできた。

「こんな時間から営業開始かよ、待たせやがって！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2480f/>

RED SUITS

2010年10月23日01時51分発行